

Jane Austenの小説

— 手紙の用い方とその効果 —

北 風 文 子

〔抄 録〕

Jane Austen (1775–1817) の*Pride and Prejudice*は、彼女が21歳の頃に原稿を完成し、すぐに*First Impressions*という題名で自費出版しようと手をつくしたけれども実現しなかった作品である。*Sense and Sensibility*が好評を得た後にこの小説が出版されたときには16年が経過していた。*Sense and Sensibility*は*Elinor and Marianne*と言う題名の書簡体であったが、*First Impressions*を執筆し終わった後の1797年11月に現在の形に書き改められたということになっている。*Elinor and Marianne*よりは後、*Sense and Sensibility*よりも前に書かれた*First Impressions*も当初は書簡体だったのではないかと考えたことがある。このことは判明しなかったが、この小説の中での手紙の重要性は明らかになった。そこで、本稿では*Pride and Prejudice*と*Mansfield Park*に現れる重要な手紙を抽出し一覧化することによって、まず手紙の用い方を考察し、それがplotに与えた効果を明らかにする。巧みな手紙の用い方とその効果は、Austenの作品が欧米でも日本でも読み継がれてきた理由の一つであろう。

キーワード：手紙の用い方、書簡、plot、効果

はじめに

Jane Austen (1775–1817) の生きた時代のヨーロッパを概観すれば、彼女の生まれた1775年アメリカは独立戦争を開始する。これが83年独立によって終ると、1789年にはフランス革命¹⁾が始まりヨーロッパ大陸はフランスの混乱に巻き込まれ次第に戦争が拡大していく。この間イギリスはロシア、オーストリアと対フランス同盟を結び、ナポレオンとのトラファルガー沖の海戦(1805年)、ワーテルローの戦い(1815年)などを勝ち抜いている。他方、イギリスには産業革命が既に起こっていた²⁾。このような時代背景下で、文学とはいえば、「散文と理性の時代」³⁾からロマン主義への過渡期であった。理性に対して想像力や感受性の優位を主張し、

人間の喜びや悲しみに関連づけて自然を崇拝した。また一般的なことより個性的なことを好み、思想的にも形式的にも作家も読者も自由を強く求める傾向を示した。先に述べた現実の社会生活の不安を忘れようとする欲求が根本にあったと考えられる。この傾向は、抒情詩に最も鮮明であるが、小説に関しても18世紀の半ばごろから空想を満足させる作品や恐怖本能を刺激して感情を煽る小説⁴⁾が流行している。こういった社会状況のもとでJane Austenは小説を書いた。

本稿では、*Pride and Prejudice*と*Mansfield Park*に現れる重要な手紙を抽出しそれを一覧化することによってまず小説のなかでの手紙の用い方を考察し、それが小説のplotに与えた効果を明らかにする。

I. *Pride and Prejudice*における手紙の用い方

*Pride and Prejudice*はAustenが21歳の頃の1796年10月から1797年11月に書かれ、*First Impressions*という題名で自費出版しようと努力したけれども実現しなかった作品である。女性が小説を書くことはまだおおぴらには認められない時代であった。彼女は家族以外の人に見つからないように、居間のテーブルで、いつでも隠せる小さな紙にこっそりと小説を書いたということである。*Pride and Prejudice*が実際に世に出るのは16年後の1813年、*Sense and Sensibility*が好評を博した後のことである。このように苦心して書かれた小説の中で手紙がどのように扱われているかを調べるために、各巻各章毎の手紙の数を集めてみた。すると次のようなことが解った。*Pride and Prejudice*が初めて出版された時は、現在のChapman編集によるOxford版のようにⅠ、Ⅱ、Ⅲ巻に別れており、Ⅰ巻は23章、Ⅱ巻は19章、Ⅲ巻も19章であったので、Ⅲ巻からなる小説として全体を把握している。

1. 各巻各章で手紙の用いられた頻度 (note、招待状を含む)

Ⅰ巻には12通の手紙が物語の中に組み込まれており、きちんとした手紙として全文が出ているものが3通⁵⁾、一部分が手紙を受け取った人によって読んで聞かせる形をとっているものが1通⁶⁾、言及されるだけのものが8通⁷⁾在る。

Ⅱ巻には、全文のもの2通⁸⁾、一部分のもの2通⁹⁾、言及のみのもの8通¹⁰⁾の計12通が在る。Ⅲ巻に属するのは、全文のものが10通¹¹⁾、一部分のもの2通¹²⁾そして言及だけのものが13通¹³⁾の計25通である。

No. 1 *Pride and Prejudice*の各巻各章で手紙が用いられた頻度 (note、招待状を含む)

	I 巻	II 巻	III 巻	計
全 文 の 手 紙	3	2	1 0	1 5
一 部 分 の み	1	2	2	5
言 及 の み	8	8	1 3	2 9
計	1 2	1 2	2 5	4 9

以上をまとめると、I 巻には12通、II 巻にも12通、III 巻には25通、合計で49通の手紙が様々な形で用いられている。このことからいかに多くの手紙が物語の中に取り入れられているか、ということと、I、II 巻に比べるとIII 巻には遥かに多くの手紙が用いられていることが解る。

そこで、これだけ沢山の手紙が誰から誰に宛てて書かれたのか、調べて分類してみた。

2. 人物ごとの発信頻度・受信頻度

登場人物達の手紙の発信と受信の頻度は別表No.2に示す通りである。

No. 2 *Pride and Prejudice*の人物ごとの発信頻度・受信頻度

発信 (受信) . 言及のみ

	I 巻	II 巻	III 巻	計
Mr. Bennet	(2)		6 (3)	6 (5)
Mrs. Bennet	1 (2)			1 (2)
Miss Jane Bennet	2 (2)	6 (2)	3 (1)	11 (5)
Miss Elizabeth Bennet	2 (2)	2 (7)	3 (5-)	7 (14-)
Miss Lydia Bennet		1	2	3
The Bennets	-(-)	(1)	(4)	-(5-)
Mr. Gardiner			4(2)	4(2)
Mrs. Gardiner		1(1)	1(3)	2(4)
Mr. Darcy	1 (-)	1	1-	3-(-)
Miss Gorgeana Darcy			1	1
Lady Catherine de Bourgh			(1)	(1)
Mr. Bingley	-(-)		(-)	-(--)
Miss Caroline Bingley	2(1)	1(1)	1(1)	4(3)
Mr. Collins	2		2(1)	4(1)
Mrs. Collins (Charlotte Lucas)				
Mrs. Forster (Harriet)			(1)	(1)
計	10-(9--)	12(12)	24-(22--)	46--(43-----)

*Pride and Prejudice*のヒーローであるDarcy氏は、(I巻10章において妹に手紙を書いている横からMiss Bingleyが彼の書き方を褒め称える場面を含めて) 発信3通、受信は0である。ヒロインのElizabethは、発信7通、受信14通で、その発信の内訳はI巻の2通が母親のMrs.Bennet宛て、II巻の2通は1つが9章でJaneに書いている場面、もう一つはMrs.Gardiner宛てである。III巻の3通は、13章で誰宛てかは分からないがとにかく手紙を書いている場面、後の2通はMrs.Gardiner宛てである。受信の内訳はI巻の2通が母親とJaneからのもの、II巻の7通は6通がJaneから、残りの1通はDarcy氏からのものである。III巻の5通はJane-2通、Lydia-1通、Miss Darcy-1通、Mrs.Gardiner-1通である。Elizabethの親友Charlotte Lucas (Mrs.Collins) には発信も受信も無い。I巻の終りである23章には、JaneからMiss BingleyとMr.CollinsからMr.Bennetへの2通が置かれており、II巻の終章はMrs.CardinerからElizabethへの手紙と、友人夫妻に伴われて旅行に出かけたLydiaが書くと約束したにもかかわらず手紙を書いて送ってこないという言及がなされている。そして締めくくりとして、登場人物のあれこれが丁寧に述べられているIII巻の終りの章には、LydiaがElizabethにお金の無心をする手紙が用いられている。

3. 発信者の意図

ここで、手紙の用い方を考察するために、発信者の意図を分類すると、意図の単純なものは— 待っているのに届かない手紙への言及がIII巻に1通、今書きつつある手紙がI巻に1通、III巻に1通ある。無事目的地に到着したとか、食事に来てくださいとか、迎えのために馬車を出してほしいといった単なる連絡のためのものと、Londonに行くことを知らせてあるにもかかわらず音沙汰が無いといった手紙に関する言及のみのものが合わせてI巻に9通、II巻に8通、III巻に14通ある。そうすると単純な内容のものはI巻に現れる12通の内の10通、II巻では12通の内8通、III巻は25通の内の16通である。以上の手紙を除くI巻の2通、II巻の4通、III巻の9通の計15通は、発信者が何らかの感情表現を明らかにする意図を持って書いたと理解できるものである。つまり資料のNo.1に示した全文と一部分がナレーションの中で明らかにされている手紙の大部分ということになる。物語りのplotを進める役目を担っていると考えられるこれらの手紙を物語の進展に沿ってもう少し詳しく見ると別表No.3の通りである。

No. 3 *Pride and Prejudice*

I 巻	13章	Mr.Collins ----> Mr.Bennet
	21章	Miss Bingley ----> Jane (一部分)
II 巻	3[26]章	Jane ----> Elizabeth (一部分)
		Jane ----> Elizabeth
		Elizabeth ----> Mrs.Gardiner (一部分)
	12[35]章	Darcy ----> Elizabeth

Ⅲ 卷	4[46]章	Jane ---->Elizabeth
		Jane ---->Elizabeth
	5[47]章	Lydia ---->Harriet (Mrs.Forster)
	6[48]章	Mr.Collins ---->Mr.Bennet
	8[50]章	Mr.Gardiner ---->Mr.Bennet
	10[52]章	Mrs.Gardiner ---->Elizabeth
	15[57]章	Mr.Collins ---->Mr.Bennet
	17[59]章	Elizabeth ---->Mrs.Cardiner
	19[61]章	Lydia ---->Elizabeth

これらの関係を発信者基準でまとめてみると、

Elizabethに関する手紙は、Eliza.---->Mrs.Gardinerは 2 通、Lydia ---->Eliza.は 1 通、Mrs.Gard.----> Eliza.は 1 通、Darcy---->Eliza.は1通。

Janeに関する手紙は、Jane---->Elizabethは 4 通、Miss.Bingley---->Janeは 1 通、

Mr.Collins & Mr.Bennetに関するものが、Mr.Collins---->Mr.Bennetは 3 通となり手紙のやり取りの多いことからElizabethとJane、ElizabethとMrs.Gardinerの親密な関係が想像できる。またMr.CollisとMr.Bennetの間にもなんらかの深い関連のあることが見て取れる。ここで注目しておきたいのは、ヒーローDarcy氏からヒロインElizabethへの手紙は、たった1通だという点である。1通だけであるこの手紙が*Pride and Prejudice*のplotにどのような効果をもたらしたかを後に考察するつもりである。

Ⅱ. *Mansfield Park*における手紙の用い方

DacyからElizabethへの手紙を考察する前に、Austenが36歳で執筆し始めた作品*Mansfield Park*における手紙の用い方を21歳の頃の作品である*Pride and Prejudice*と比較してみる。*Mansfield Park*はⅠ巻が18章、Ⅱ巻が13章、Ⅲ巻は17章から成っており、各巻各章で用いられた手紙は、Ⅰ巻に 9 通、Ⅱ巻に12通、Ⅲ巻には24通の合計46通である（繰り返し同じ人物の間で手紙のやり取りが行われたという言及のみのものは、回数が特定できないので一回として数えてある。したがって実際はもっと多くの手紙が往復したことになる）。比較をわかりやすくするために*Mansfield Park*で用いられた手紙の頻度をNo. 4 として表示する。

No. 4 *Mansfield Park*の各巻各章で手紙が用いられた頻度 (note、招待状を含む)

	I 巻	II 巻	III 巻	計
全 文 の 手 紙	0	2	3	5
一 部 分 の み	1	2	6	9
言 及 の み	8	9	1 5	3 2
計	9	1 3	2 4	4 6

*Mansfield Park*の表No. 4 を*Pride and Prejudice*の表No. 1 と比べてみると各巻毎の手紙の数は改めて驚くほどに、ほとんど変わりが無い。しかし全文の手紙は三分の一に減っていることが明らかになった。一部分のみを用いたものは5通から9通へと倍近く増加し、言及のみのものは29通から32通に変化している。全文の手紙を少なくした結果ナレーションに取り込んで一部分のみ現わされたものが増えたと見ることができる。*Mansfield Park*の人物毎の発信頻度と受信頻度に関して、発信の数がきわだって多いのはMary (Miss. Crawford) とFannyである。Fannyは受信の数も多い。そして*Mansfield Park*のヒーローEdmundはFannyに宛てて4通の手紙を書いており、*Pride and Prejudice*のヒーローDarcyの1通だけとは違っている。発信者・受信者毎の分類は省略して、*Pride and Prejudice*と同様に*Mansfield Park*においても発信者が何らかの感情表現を目的として書いたと見ることで重要な手紙を一覧化すると表No. 5 のようになる。

No. 5 *Mansfield Park*

I 巻	1 章	Mrs. Price ----> Lady Bertram (言及のみ)
	4 章	Sir Thomas ----> Lady Bertram (言及のみ)
II 巻	9[27]章	Edmund ----> Fanny (note)
		Henry (Mr. Crawford) ----> William (note)
	13[31]章	Mary (Miss Crawford) ----> Fanny
		Fanny ----> Mary
III 巻	13[44]章	Edmund ----> Fanny
	14[45]章	Mary ----> Fanny (一部分)
	15[46]章	Edmund ----> Fanny

*Mansfield Park*の場合、I 巻とIII 巻の終りには手紙が用いられていない。しかしII 巻は、Miss CrawfordがFannyに宛てて、Henryの求婚を受け入れるようにと促す手紙と、返事を強要されたFannyが “I do not know what I write, but it would be a great favour of you never to mention the subject again.”¹⁴⁾ と、相手を傷付けずに自分の意思を伝えようと苦慮して書いた手紙で終わっている。なお、表No. 3、表No. 5 の太字はplotの展開のために重要な手紙であり、囲みをつけたものは特に重要な手紙であると考えたものである。以上、各巻毎に手紙を抽出して手紙の用い

方を明らかにしてきたので、これらの手紙が小説のplotに与えた効果を次に考察する。

Ⅲ. 手紙がplotに与えた効果

1. *Pride and Prejudice* (資料 No. 3 参照)

発信者が何らかの感情の明示を意図して書いた手紙の一覧と考えられる資料 No. 3 に沿って *Pride and Prejudice* のplotを要約すると、I 巻は、Netherfield Parkを金持ちの若い男性が借りたことを聞きつけたBennet夫人が、娘の良い結婚相手になるかもしれないので草々に挨拶に行つてほしいと夫を急き立てる。ところが夫の方は、行くつもりで有るにもかかわらず、からかい半分に皮肉を言って夫人をいらいらさせる。実はさっさと訪問を済ませていて、お気に入りの娘Elizabeth (Lizzy) の良き相手になれる人であることを願う。夫とは異なり夫人の方はJaneとLydiaが最良である。そうこうしている内に舞踏会が開かれて、噂の主Bingleyが友人Darcyと一緒に会場に現れる。Bingleyの打ち解けた様子とDarcyの取り澄ました振る舞いと対比が舞踏会に居合わせた人達に強い印象を与える。BingleyとJaneは互いに好感を持ち、ElizabethはDarcyの次の言葉を偶然聞いてしまう。“She is tolerable; but not handsome enough to tempt *me*; and I am in no humour at present to give consequence to young ladies who are slighted by other men.”¹⁵⁾ こんな風に言われたのではfirst impressionの良いはずがない。ちょうどこの頃Bennet姉妹にとって従兄弟に当たるCollinsからBennet氏に手紙が届く (I 巻13章)。その内容は、これまでは自分の父とBennet氏が不仲のために付き合いを絶っていたけれども、自分は限定相続人である。美しい娘さんたちに悪いようにはしない、私には良い考えが有るといった奇妙なものであった。そこで家族はCollinsがどんな人なのかとさまざまに憶測をする。この時ElizabethはCollinsの手紙から次のように感じた。

“He must be an oddity, I think,” said she. “I cannot make him out. — There is something very pompous in his style. — And what can he mean by apologizing for being next in the entail. — We cannot suppose he would help it, if he could. — Can he be a sensible man, sir?”¹⁶⁾

約束の日にElizabethの予測した通りもったいぶった奇妙な人物Collinsが現れJaneにまず目をつけるが、Bennet夫人のJaneはもうお相手が決まりそうだという暗示で直ちにElizabethにプロポーズすることに心を変える。Elizabethに断られ結局Elizabethの友人Charlotteと婚約をして帰って行く。ElizabethはDarcyを嫌う一方でhandsomeなWickhamに特別の感情を持つ。Wickhamは会った早々に、先代Darcyが遺言で約束してくれたことをDarcyは守らなかったという話をElizabethに聞かせる。ElizabethはWickhamの話をそのまま信じてますますDarcyに対する嫌悪感を募らせる。まもなく、DarcyとBingleyが突然Londonへ去り、JaneはBingleyの気持ちををはかり

かね悲しみを表に出さないようにしている。そんな彼女のもとへ、Netherfieldには戻らず Londonでしばらく過ごすことになったという便りがBingleyの妹から届く (Ⅰ巻21章)。Ⅰ巻の終わりである23章では、Bingleyの妹に宛ててJaneは大急ぎで返事を書き、Bingleyのことをもっと詳しく知りたいと思ひながら、再び手紙が届くことを心待ちにしている。そして、Collinsから近じかにまたお邪魔するという身勝手な内容の手紙が届いたことが話題の場面が表されている。このように手紙を話題として取り上げることによってCollinsの結婚へ向けての意気込みとJaneの頼りないどっちつかずの状況との対比が巧みに著わされている。

ここでは、Collinsの手紙 (Ⅰ巻13章) が、Bennt一家は表面上穏やかに暮らしているけれど、この一家の財産は父親の死と同時に他人の手に渡ってしまう、という事実を読者に伝えるとともに初めて物語りに登場するCollinsの奇妙な性格を暗示しており、読者はBennet家の人々がしたと同じように、想像力を働かせて実際にCollinsが登場するまでに自分なりのCollins像を作る楽しみがある。即ち手紙によって新しい事実を加え、文面の暗示によって想像を促すことで、plotに膨らみを持たせる効果が出ている考えられる。またJaneの不安な気持ちが返事の手紙を持っているという状態を示すことで上手く表現されており、plotの新しい展開を期待させる効果も明らかである。

Ⅱ巻において、JaneはGardiner夫妻の勧めで、失恋の傷を癒すためにLondonの夫妻の家に滞在する。Bingleyに会えるかもしれないという淡い期待は実現せず、彼の妹Miss Bingleyからも冷たいあしらいを受けて忍耐を強いられる。一方Elizabethはお金のために心を他の女性に移したWickhamとの関わりに結末をつけて、心配をして何かと忠告してくれた叔母のGardiner夫人にそのことを伝える (Ⅱ巻3 [26] 章)。その後Charlotteの招きでHunsfordの新居を訪れ、Charlotteの様子から彼女の幸せを危ぶんだ自分の予測が当たらなかったことに気がつく。そしてこの地でElizabethはDarcyと再会する。というのもCollins夫妻を庇護しているLady Catherine de Bourgh はDarcyの叔母に当たるので、Darcyが従兄弟のColonel Fitzwilliamを伴って訪ねてきたのである。ある日Elizabethは、Colonel Fitzwilliamから「危ういことに成りそうだった友人を助けた」という話をDarcyがしていたと聞かされる。これを耳にしてElizabethは気分が悪くなる。彼女が引きこもって、Janeからの悲しみを押し隠した手紙に心を痛めていると、そこへ突然にDarcyがやってきて彼女にプロポーズする。Elizabethは予想もしていなかったので、言葉も出ないほど驚き、顔色も変わりただ黙ってじっとDarcy見つめる。Darcyの態度は、断られるはずがないと思っていることが明らかであった。自分の愛情を伝えるよりは身分の違いを心配する方に忙しいという感じを受けたElizabethは、はっきりと拒絶する。その時、Elizabethは、Darcyが姉JaneとBingleyの仲を割いたこととWickhamの未来をだいなしにしたこととを非難した。血相を変えて帰っていたDarcyが翌日Elizabethに手渡した手紙 (Ⅱ巻12 [35] 章) の冒頭は次の通りである。

Two offences of a very different nature, and by no means of equal magnitude, you last night laid to my charge. The first mentioned was, that, regardless of the sentiments of either, I had detached Mr. Bingley from your sister, — and the other, that I had, in defiance of various claims, in defiance of honour and humanity, ruined the immediate prosperity, and blasted the prospects of Mr. Wickham.¹⁷⁾

この手紙は、Janeがそれほど熱心にBingleyを愛しているとは見えなかったこと、Wickhamの権利は彼の希望でお金に変えられたこと、それはColonel Fitzwilliamだけでなくほかにも証明できる人の有ること、またWickhamはDarcyの妹Goregianaを彼女の遺産目当てに連れ出そうと企てたこと等、実に理路整然とElizabethの非難に対して釈明をする内容である。Elizabethが何度も何度も手紙を読み返し、いやいやながらついにDarcyのJaneに対する見方は間違っていないこと、Wickhamの行動の不誠実で卑しいことを認め、自分の誤った考え方を認識する場面である。

DarcyからElizabethへのこの手紙は、ElizabethのWickhamに対する見方を180度つまり正反対の方向に変える働きをしている。Darcyに対しても同じことが言える。こういうことが可能な理由は、手紙が何度でも読み返すことができること、どんなに時間がかかっても良いこと、深く考えられること、急いで返事をしなくても良いこと等が上げられる。(これは会話と比較して考えてみるとよく理解できる。会話では同じことを何度も聞き返すのは失礼に当たる。深く考えすぎて沈黙が長すぎると気まずい雰囲気になる恐れがある。手紙の返事はゆっくりと考えたり、誰かに相談してから書けばよいが、会話ではそういうわけには行かない¹⁸⁾。) こういうわけで、たった1通の手紙が登場人物の性格を全く違ったものとして読者が考えることを可能にしてしまった。したがって、この手紙がplotに与えた効果は、善人と悪人を入れ替えることを可能にし、これ以降のplotを整えていることである。Elizabethの意識変化を促し、文そのものによってDarcyの性格を暗示する効果も明らかである。DarcyとElizabethが互いに背を向ける形、あるいは片方が背を向けている形で進展していた物語りが、この手紙以降互いに向きあう形で進展していくであろうことが予測できる。

ここまで*Pride and prejudice*において最も効果的であると考えた2通の手紙 (I巻13章 Collins---> Mr. Bennet, II巻12章 Darcy---> Elizabeth) について考察した。次にMansfield Parkにおける2通の手紙 (II巻9章 Edmund---> Fanny, III巻13章 Edmund---> Fanny) について考察する。

2. *Mansfield Park* (資料No. 5 参照)

*Pride and Prejudice*の場合と同様に表No. 5に沿って部分的にplotを要約すると、I巻は、3姉妹の末っ子Mrs. Priceが貧乏と子沢山の窮状を救って欲しいと訴える手紙 (I巻1章) を姉Lady Bertramに書き送ったいたという形で始まる。長い間交渉を絶っていた後のことである。こう

いう場合直接お願いをするよりも手紙のほうが容易であるのは、日常生活の中で我々がすでに経験していることである。手紙が用いられたことによって、この物語りの発端がいかにもありそうなことだと感じられる。手紙を送った相手だけでなく読者にも同時にMrs. Priceの窮状を伝えている。つまり、plotを自然な形で展開し、しかも読者を話の中に引き入れることが可能である。この手紙を受け取ったLady Bertramはアレコレと心づくしの品物を送り、Mansfield Park内の牧師の妻におさまっているもう一人の姉Mrs. Norrisは誰か一人子供を引き取ってBertram家で教育を受けさせようと、Sir Thomas、とMrs. Priceの両方に熱心に働きかける。あまり気の進まなかったSir Thomas BertramもMrs. Norrisの熱意に説き伏せられてFannyを預かることになる。Bertram家に引き取られたFannyが悲しいことの多い中で従兄弟のEdmundの優しさに出会い、彼を心の拠り所にして、可憐に成長していく。

Ⅱ巻では、Fannyは、Sir Thomasが彼女のために開いてくれる舞踏会で兄のWilliamから贈られた十字架を身につけたいと願う。そこで十字架を胸に飾るのに似合うチェーンを借りようとMary (Miss Crawford)を訪ねる。Fannyが借りたいと選んだチェーンをMaryはプレゼントしてくれるが、それはHenry (Mr. Crawford)がMaryに贈ったものだとか聞かされて、返そうとする。しかし無理に手渡されて、複雑な暗い気分で帰宅する。沈みがちな気持ちを何とか持ちこたえて部屋に入ると、思いもかけないことに、そこではEdmundが何かを書いているところだった。EdmundはFannyのために、こっそりとチェーンを取り寄せてプレゼントするつもりだったと彼女に話しかける。明日が舞踏会という今日やっと届いたので、チェーンを持ってFannyを訪ねたのだ。ところがFannyは居ないので、彼女に宛ててnote¹⁹⁾ — “My very dear Fanny, you must do me the favour to accept”²⁰⁾ (Ⅱ巻9章) を、書いていたのだ。EdmundはMaryを愛しており、Fannyに対してはただ可愛い従姉妹としか感じていない。一方FannyはMansfield Parkに預けられた当初から優しいEdmundをずーと慕っており、今では他に比べるものがないほど強く密かに恋心を抱いている。そのことはここまでの物語りの中でほのめかされている。

初めてEdmundの書いたnoteを手にしたFannyは、それを宝物だとも、“My very dear Fanny”という言葉がいつまでもながめていられるものなら....とも感じている。ここまでFannyの心がほのめかされてはいたけれどもはっきりとはわからなかった読者は、この場面のnoteによって、Fannyの心情を哀れむと同時にこの後どのような展開があるのだろうかと予測し期待を膨らませることになる。従ってnoteは、plotに膨らみを持たせ、FannyとEdmundの感情の差を強く認識させて、これ以降のplotの複雑さを暗示する効果を持っている。

Ⅱ巻では、HenryがFannyを誘惑して自分を恋しく思わせ、その後で相手にしないで苦しめてやろうという目論見でFannyに接近する。ところがFannyの愛らしさに自分のほうが本気で恋してしまいFannyにプロポーズする。Fannyは二人の従姉妹MariaとJuliaがHenryを取りあって仲たがいをしたこと、Henryはどちらの気持ちも大切にしていなかったことを見て、嫌な人だと思っていた。MaryのHenryを受け入れるようにという勧め(Ⅱ巻13章)にも当惑するばかりで、

必死で断りの手紙(Ⅱ巻13章)を書く。

Ⅲ巻は、Ⅱ巻のplotを受けて、プロポーズを断ってほっとしているFannyの辛い立場が明らかになっていく。Edmundへの恋心を自分だけの胸にそっと収めているFannyは、Sir ThomasだけならともかくEdmundからもHenryとの結婚を承諾するようにと説得されて悲しみにくれる。その上にEdmundから、MaryとFannyがいちばん大切な二人で、FannyはMaryの次ぎだということも明かされる。Maryにプロポーズしようと思っているEdmundは、FannyがHenryと結婚してくれれば、いつまでも身近に居てもらえと考えている。またSir Thomasは、Fannyの家庭状況からは望んでもかないそうもない結婚相手を嫌がる彼女を“Self-willed, obstinate, selfish, and ungrateful.”²¹⁾ であると考えている。Fannyのほうは、自分を育ててくれているSir Thomasにそのように思われることは耐えられないけれども、かといって二人の従姉妹のHenryとのかかわりを話すわけにもいかず、Edmundを愛しているとも言えずにただ耐え忍んでいる。しかも、いつもFannyに口やかましく恩着せがましい伯母のMrs. Norrisは、Juliaが求婚されて当然のところをFannyが求められたということだけでFannyを憎んだ。自分には相談もせず結婚を拒んでいると聞いて更に憎んだ。Sir ThomasはFannyを実家に帰せば考えを改めるかもしれないと思う。8年ぶりに実家に帰されたFannyは、あれほど離れるのが辛かったところとは思えず、Mansfield Parkの美しさとそこに住む人々を懐かしく思い、迎えに来てくれることをひたすら待つ日々を送る。Fannyの気持ちがそんな状態のところへHenryが突然に訪れて、一緒に教会へ行ったり散歩したりMansfield Parkのことを話したりしてくれる。FannyはHenryのことを少しは見直し、自分にも考え違いがあったのではないかと迷ったりする。待ち焦がれているEdmundからの便りはなかなか届かず、やっと届いた手紙は次のような内容であった。

“My dear Fanny,

“Excuse me that I have not written before. ... I cannot give her up, Fanny. She is the only woman in the world whom I could ever think of as a wife. ... The loss of Mary I must consider as comprehending the loss of Crawford and of Fanny. Were it a decided thing, an actual refusal, I hope I should know how to bear it, and how to endeavour to weaken her hold on my heart — and in the course of a few years — but I am writing nonsense — were I refused, I must bear it; and till I am, I can never cease to try for her. This is the truth. The only question is *how*? What may be the likeliest means? ...I have nearly determined on explaining myself by letter. ...

Your's ever, my dearest Fanny.”²²⁾

Mansfieldを去ってLondonに暮らすMaryにプロポーズするつもりで訪ねたEdmundは、3週間もLondonに居ながら目的を果たせずにむなしく帰宅する。そして苦しい胸のうちをFannyに書き送ってきたのである。Fannyはこれを読んでEdmundに対する嫌悪と怒りでいらいらさせられて

— “He is blinded, and nothing will open his eyes, nothing can, after having had truths before him so long in vain.”²³⁾ —と感じている。自分がMaryを好きにはなれないことや、Henryの申し出を受け入れない裏にEdmundへの愛情のあることに全く気がつかないEdmundにやり場のない怒りを激しく募らせる場面である。Fannyが自分に関係のある個所を何度も読み返し、その都度Edmundの目の開いていないことに怒りを募らせる様子が読者にひしひしと伝わってくる。Edmundの長い手紙は、FannyのEdmundへの愛情の深さを思い起させ、Edmundの感受性の鈍さに歯がゆい感情を抱かせる。

この手紙は、そのままこれまでのplotを総括し、複雑な人間関係を整理するのに役立っている²⁴⁾。しかし、*Pride and Prejudice*のDarcyの手紙ほどの衝撃的な効果を与えるには至っていないと考えられる。

おわりに

*Pride and Prejudice*と*Mansfield Park*に現れる手紙を抽出して各章毎の手紙の数、人物毎の発信頻度・受信頻度、発信者の意図等、手紙の用い方を調べ、その手紙が小説のplotに与えた効果について考察した。Somerset MaughamはAustenのことを「どの作品にもこれといって大した事件は起こらない。それでいて、あるページを読み終わると、さて次になにが起こるのだろうか、急いでページを繰らずにはいられない。ところが、ページを繰ってみても、やはり何も大したことは起こらない。だが、それでいて、またもや ページを繰らずにはいられないのだ。」と評している。Austenの小説は激動の時代に書かれたとはとても感じられない穏やかなものである。それでも欧米や日本で読み継がれてきたのは、人間にとって日常生活の些細な出来事ほど大切なことはないという事実、人は歳を重ねるにつれて気づくからであろう。手紙の魅力はインターネットを通してのメールにまで発達したけれども、昔ながらの書簡の魅力は捨て難いものである。Darcyの手紙は*Pride and Prejudice*の魅力を保つのに大きな力を持っているし、*Mansfield Park*の魅力もEdmundの手紙に多くを負っていると私は考えている。また、Elizabethの親友Charlotte Lucasは後から付け加えられたのではないかと言われているし、私もそう考えたことがある。彼女は一通の手紙も書いていないことが、その疑問に対する一つの答えになるのではないだろうか。

〔注〕

- 1) 当時のフランスは第一身分（聖職者）、第二身分（貴族）、第三身分（平民）から成っていた。啓蒙主義思想が盛んになり、不合理な社会を打破し自由な生活を営みたいという革新の気風が勃興した。イギリスにおける立憲政治の確立や、自由平等の原理を掲げたアメリカの独立革命の成功はこの傾

- 向を一層強めた。1789年5月、1614～15年を最後に174年間開かれなかった三部会が招集され議決方法をめぐって分裂、第三身分の議員は国民議会と称し憲法が制定されるまでは解散しないことを誓った(テニスコートの誓い)。これを保守的な貴族に動かされて国王が武力で弾圧しようとしたため怒った民衆が7月14日バスティーユの牢獄を占領した。
- 2) 当時の日本: 1774年-杉田玄白『解体新書』。1787～93年-寛政の改革。1808年-間宮林蔵樺太探検。
- 3) 「散文と理性の時代」 our age of prose and reason: Matthew Arnold (1822～88) の言葉。Miltonの時代以来次第に発達した散文が進歩し、近代散文が形成された。
- 4) ゴシック小説: 中世の遺物である古寺院や古い城を中心に書かれた夢のような怪奇物語。
- 5) I 巻: 全文の手紙3通 (7章: Miss Caroline Bingley -> Miss Jane Bennet, Jane-> Elizabeth; 13章: Mr. Collins->Mr. Bennet)
- 6) I 巻: 一部分のもの1通 (21章: Miss Bingley->Jane)
- 7) I 巻: 手紙に言及のみ (3章: the Bennets->Mr. Bingley, Mr. Bingley; 9章: Elizabeth->Mrs.Bennet; 10章: Darcy is writing; 12章: Elizabeth->Mrs. Bennet, Mrs. Bennet->Elizabeth; 23章: Jane->Miss Bingley, Mr. Collins->Mr. Bennet)
- 8) II 巻: 全文の手紙2通 (3[26]章: Jane->Elizabeth; 12[35]章: Darcy->Elizabeth)
- 9) II 巻: 一部分のもの2通 (3[26]章: Jane->Elizabeth, Elizabeth->Mrs.Gardiner)
- 10) II 巻: 手紙に言及のみ8通 (1[24]章: Miss Bingley->Jane; 3[26]章: Jane->Miss Bingley, Jane->Elizabeth, Jane->Elizabeth; 9[32]章: Elizabeth is writing to Jane; 11[34]章: Elizabeth is examining letters from Jane; 19[42]章: Lydia->the Bennets, Mrs. Gardiner-> Elizabeth)
- 11) III 巻: 全文の手紙10通 (4[46]章: Jane->Elizabeth; 5[47]章: Lydia->Harriet; 6[48]章: Mr.Collins->Mr.Bennet; 7[49]章: Mr. Gardiner->Mr.Bennet; 8[50]章: Mr. Gardiner->Mr.Bennet; 10[52]章: Mrs.Gardiner->Elizabeth; 15[57]章: Mr.collins->Mr.Bennet; 17[59]章: Elizabeth->Mrs. Gardiner, Mr.Bennet->Mr.Collins; 18[61]章: Lydia->Elizabeth)
- 12) III 巻: 一部分のもの2通 (4[46]章: Elizabeth->Mrs.Gardiner; 9[51]章: Elizabeth->Mrs.Gardiner)
- 13) III 巻: 言及のみ13通 (4[46]章: Janeの手紙が未到着; 5[47]章: Mr.Bennet-> Family; 6[48]章: Mr. Bennet->Family, Mr.Gardiner->Mrs.Gardiner, Mr. Bennet->Family, Mr.Gardiner->the Bennets; 7[49]章: Mr.Bennet->Family; 8[50]章: Mr.Bennt->Mr.Gardiner; 13[55]章: Elizabeth is writing; 16[58]章: Darcyからの手紙ではなく本人が来る; 17[59]章: Mr.Darcy->Lady Catherine de Bourgh, Miss Bingley<->Jane; 18[60]章: Miss Darcy<->Mr. Darcy&Elizabeth)
- 14) Jane Austen, *Mansfield Park*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1923; repr.1982) Vol. II, Ch.XIII, p.307.
- 15) Jane Austen, *Pride and Prejudice*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1923; repr.1983) Vol. I, Ch.III, p.12.
- 16) ---, Vol. II, Ch. XIII, p.64.
- 17) ---, Vol. III, Ch. XII, p.196.
- 18) 会話でも難しいことは即答を避け、誰かに相談した後に返事をすることはできるが、込み入った内容については誤解をしたり、忘れてたりして、「言った」「言わない」「聞いた」「聞かない」といった行き違いが起こりがちである。
- 19) Note : a short or informal letter. (COD)

- 20) Jane Austen, *Mansfield Park*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1923; repr.1982) Vol. II, Ch.II, p.265.
21) ---, Vol. II, Ch. I, p.319.
22) ---, Vol. III, Ch. XIII, pp. 420-424.
23) ---, Vol. III, Ch. XIII, p.424.
24) なお手紙の効果がこの手紙の中でEdmundの考えとして述べられているが、私の考えるところでもある（おそらくAustenも同じ考えであっただろう）“I think a letter will be decidedly the best method of explanation. I shall be able to write much that I could not say, and shall be giving her time for reflection before she resolves on her answer, and I am less afraid of the result of reflection than of an immediate hasty impulse; I think I am.” (Vol. III, Ch. XIII, p.422).

[参考文献]

Primary Sources:

- Jane Austen, *Pride and Prejudice*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1923; repr.1983).
---, *Mansfield Park*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1923; repr.1982).
---, *Sense and Sensibility*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1923; repr.1982).
---, *Northanger Abbey and Persuasion*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1923; repr.1986).

Secondary Sources:

- Frank W. Bradbrook, *Jane Austen and her Predecessors* (Cambridge, 1966; repr.1967).
John Odmark, *An Understanding of Jane Austen's Novels* (Oxford, 1981).
J.E. Austen-Leigh, *Memoir of Jane Austen* (Oxford, 1926; repr.1963).

(きたかぜ ふみこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導教員：古我 正和教授)

2000年10月18日受理